

舊友

永松定

私たち兄妹を學校に出すために、一家が田舎の家を引き拂つて、熊本郊外の極く閑靜な高臺に、小さな軒の家を借りて、ひっそりとしめやかに暮してゐた時分の話である。私は或る日珍らしい人から訪問された。恰度、五月の末か六月の始のことで、一本の老いた柿木が庭の上一杯に若葉を擴げて、私の部屋をいくらか暗いまでにしてゐる、よく晴れた日の午後であつた。私は何か小説本を漫然とみてゐるやうに思ふ。

いつも門だけしどに閉ぢた儘にしてをく竹の門が、一度開いて又ビヤーンと鈍い音をさしてすぐ閉つたのが聞けた、——と思ふともうすぐ玄關で、

「御免！」と確かに男の聲である。

私へのお客だとすぐ思つた。それに母と妹とは裏の井戸側で洗濯物をしてゐて近くに居なかつたので私はすぐ立つて行つた。

全く見覺のない顔が控へてゐた。一瞬間、そこに軽い吃驚と失望があつた。

私は土間に下りて、その男が一体何ものなるかを探る、鋭い目付でシゲシゲと彼を見守つてやつた。その男も睨み返すやうにしてをつた。私たちの目は空中で結合されてゐた。嶮しい沈黙が續いた。

『はア……』

彼は突然哄笑し出した。

『判らないんだらうな、僕ア太田黒だよ』

さう云つて彼は憐れむやうな目付で私をみた。

『太田黒！太田黒！………うん、あれか』

私は漸く遠い記憶の絲を手繰りよせることが出来た。

太田黒と云ふのは中學時代の同級生であるが、女中との關係が發覺して、彼が四年級の初め頃、學校を追れた男である。其の後、家を飛び出してからは、彼が何處にどうしてゐるか誰も知らなかつた。中學時代にはいくらか懇意にしてゐて、彼も一度位私のうちに遊びに來たことがあつた。

が、その時分の太田黒——少くとも私の記憶の中の太田黒——と、今ここにかうして、かうもり傘を持つて立つてゐるこの青年とを、一緒に結び附けて考へることは、私はどうしても出来なかつた。

あの時分太田黒は、肥形でこそなかつたが、肉付のよい、目のまるまるとした快活な少年であつた。

ところがこの青年は、已に生活に疲れ果てた何の希望もない者の、好箇の範型モザルに過ぎなかつた。馬鹿に大きい額、嶮しく引きよせられた眉、其のものど昔大きかつた今は細くされた眼、（それは普段は濁つて何の生氣もないが、時々、非常な奥の方から、何かを探るごとく、キヨロリ、キヨロリと凄い光を

放つた)、態度の上に自然と現はれる或る種の圖々しさ、フト、ユスリではないかと氣遣はれたほど、それは昔の太田黒とは打つて變つてゐた。そして、打ち撲りたい程の憎悪のかはりに、私は唯不思議な感情で支配されてゐた。私は呆然として、どう口を利くべきかを知らなかつた。二人が地獄で邂逅したとすれば、殆んどこれに近い感情を経験するであらうと、私は後で考へた。

『まあ、こつちに上れ』

長い間の沈黙からかへると、すぐ私はさう云つて、先に立つて私の部屋に來た。

『こんなものを讀むんか。止せ、止せ。馬鹿になるよ』

暫くの沈黙の後、私の讀みさしの小説本をみて、彼が蕨々しく云つた。私も少しムツトしたが黙つてゐた。

又沈黙が続いた。私は決して心を許してゐなかつた。彼の口の利き方や態度と、私の記憶の中の彼の其れどが食ひ違つて、私に妙にソグハナイ感情を醸した。然し、

『で、今までどこにゐたのか』

と、底の知れない淵を臨む好奇心で、其れが一番に氣になつた。

『滿洲にゐた』

『滿洲?』——さうして何をしてゐたのか』

『何アに、炭坑の方に出てゐたんさ——』どうせ食はなけアならんからね』

『うん、それで?』と私は色々に訊きたがつたが、彼はそれに觸れられるのが不快らしく、『どうでも

いいぢやないか』などと云ひ濁して、努めて避けやうとした。

どう云ふ数奇な運命が彼を滿洲の野に待つてゐたか、又彼が如何なる人間にまで變化してゐるか、其の他色々のことを、始終想像もし觀察もしてゐた私は、まだ彼を、現在對坐してゐる彼を、昔の太田黒として卒直にそのまゝ受け容るることは出来なかつた。彼と私との間には大きな溝が未だに横つてゐて彼と抱き合はうとする私の心を無理にそれが防遏してゐることを、私は明白に感じた。が、それはどうすることも出来ないことだし、無理にしようとしても何にもならないことだし、又しようとも思はなかつた。

こんな私の態度が、彼にも感ぜられたのだらう。

『舊友のつもりで、ワザワザ尋ねて來たら、妙に烹飪さらないぢやないか』

かう云つて太田黒は一寸寂しい笑ひ方をした。私はギグリとした。が、その時である。さう云つた彼の顔に、いやその時の一体の様子に、何かしら昔の太田黒の影がチラツと閃いたのを、私は認めた。眼前の太田黒と私の記憶の中の彼とは、この時、一本の絲に繋がれてしまつた。

私は彼が嘗つて私のうちに來たとき、如何に彼の手品で私の小さい妹たちを喜ばしたかを、彼に語つた。私たちはその時分の懐かしい記憶の中に浸ることによつて、もつと密接にお互を結合させた。さうして私たちは共に笑つた。かうして、だん／＼と私の記憶の中の太田黒と現在の彼とが結びついて、遂に私の意識の中で全く同一のものに融合されてしまつた。かうなると不思議なものである。二人は忽ち以前にも増して打ちとけてしまつた。

私は多分書物が入つてゐる彼の風呂敷を開けてみた。すると、中から島田清次郎の「大望」と谷崎潤一郎の何かが出てきた。太田黒はアワテテ、何どか呟いて、その瘦せ細つた手で、書物をクルクルと風呂敷に包んでしまつて、ゾンザイに傍に投げ出した。

『なあんだ、君もこんなもの讀んでゐるぢあないか』

私の小説本をみて、彼が私を非難したのを心に持つて、私は云つた。

『うん』

案外眞面目に答へた。

そして私たちは忽ち文學の話をし出した。彼が好きなのが如何に私の輕蔑してゐた所の人だつたにせよ、その話は兩方共大變氣持よかつた。彼は如何に現文壇が沈滞してゐるか、如何に吾々はそれに取つて更るか、又如何にそのためには常住の勤勉が必要であるかを、熱心に説いた。さういふ時、彼は實際非常に眞面目に見えた。

『僕も出来るだけ讀まうと思ふんだ』

彼は時々目を閉ぢ乍ら、熱心に、然し靜かな句調で言ふのであつた。

『出来るだけ讀むんだね、出来るだけ!』

『一月にどの位づつ讀む?』

私は好奇心に誘はれるままに訊いた。

『うーむ………そんなこと、どうでもいいぢやないか』

彼は外らさうと試みたが、私はどこまでも追求した。

『まあ、大抵二冊だね………それも、目を通すだけならいくらでも出来るけど』

さう、尻上りに云つたが、それだけでは、安心出来ないよと云ふ風に、附け足して彼は言つた。

『なあに、僕は讀めるだけ讀めばいいんだ。讀めるだけゆつくりとネ。さう急がなくてもいいから』
その調子は情ないものだつた。

私はヒドク可笑しかつたが、笑ひはしなかつた。

それから又彼は思ひ附いたやうに言ひ出した。

『君がこんなこと云ふやうになつたかと思ふと可笑しいね』

私は又私で、彼がさう云ふ文學の話など眞面目にするやうになつたことを、案外に思つてゐた。

『この頃は猫も杓子もそんなことばかり言つてゐるからね』と言はうかと思つたが止した。

今度は太田黒は何か書いたものがあるなら見せてくれと言ひ出した。

『未だ書きかけでね、實は見せたくないんだよ』

『さう云ふところを、どうでもいいぢやないか』

彼は明らかに、書きかけで辻褄の合はないものをみせたくはないと私が考へたのだ、と思つたらしかつた。然し私は一方見て貰ひたい——私のものが他人にどんな手筈があるかが知りたい氣持があつた。

彼は私が渡した原稿を一枚ほど、恐ろしく目を光らして讀んでから、

『どれどれ、ひとつゆつくりとかかからなくちや』

と言つて、立ち上つて、袴をどいて壁にかけ、懐中物をすつかり取り出し、おまけに腕時計まではづして、身軽になつておいて、さて悠々と胡坐をかいて、また最初から読み出した。私はオヤオヤと云ふ程の意外と反感とを以つて其の動作を見守つてゐた。彼は一行を二度づつ讀むらしかつた。そしては時折、ふむ、と頷いてゐる。顔は緊張の極度を示し、所謂眼光紙背に徹するの概があつた。

かう云ふ風に熱心に私の原稿をみてくれた人は——無論それもたつた二三人の友人に過ぎなかつたけれども——誰もゐなかつた。

自分の戀を告白し終つて今はたゞ愛人の宣言をのみ待つ若い戀人の、あの不安と豫期の交錯した感情——それと殆んど同じ感情を、私は自分のものを讀んで貰うときにはいつも感じてゐたが、この度はいつもの三四倍も強く經驗せねばならなかつた。彼が讀了するまでのもどかしさつたら！私は縁側を行つたり來たりした。雑誌を讀んだ。小便に立つた。實際彼は、十五枚の原稿を一時開半もかゝつて、やつと讀み終つたのである。さうして、一つ大きく溜息をついた。

すかさず私が訊いた。

『どうだつた？』

長い長い沈黙の後、彼は原稿を指で軽く叩き乍ら、やうやく口をきいた。

『かう云ふのが、ほんど一の藝術だらうね』

『と云ふと？』

私は有頂天で、急き込み乍らきいた。

『僕も随分色んなのを讀ませられたがね、中には感激しつちまつて足が上つてるのもあれば、中にはヒドク感傷的だつたり、果は自家撞着だネ。こんなのは實際見なかつたよ』

さう云ひ乍ら彼は處々めぐつて小聲で又讀んでみたりした。

讀辭と云ふものはこれが初めてであつた。私が心血をそゝいで書いた傑作のつもりのもを、校友會の雜誌に出して貰はうとしたら、委員はそれを冷淡に没書した位で、それ以來私は全く消氣込んでゐた。私は志賀直哉のことを話し、その「夜の光」を彼に見せた。彼はそれを借してくれと言つたので、私は實は手放したくはなかつたが貸した。

一時間の後、私たちは、下では市を貫通する小流れの岸の大きな檜木の蔭に、小舟を繋いで遊んでゐた。空は全く晴れて、遙か東方、阿蘇のあたりに一帶の白雲が山の如くつつ立つてゐる外、雲らしい影も見られなかつた。

彼は、肺尖で彼地びちを去らねばならなかつたこと、うちが零落したため金がなくて書物を買はうにもどうにもならないこと、自分の友どすべきものがこちらに一人もゐないこと、うちでは子供が多くて煩さくて仕様がないうこと、それで夜大變晩くまで起きてゐること——大抵二時か三時位まで——それからどうにかして熊本に出て下宿したいこと等を、しみじみと話してくれた。

『でもね、親父の知人でね、××新聞に關係のある人がゐるんだよ。それが君、僕をその新聞社に紹介しやうと言つてゐるさうだ』

『うまくゆくだらうね』

『大抵うまくゆくだらうとは思ふが』

と、もう云はないのかと思つたら、

『さうすれア、僕もほんどうの生活には入れるんだ』

彼は後の一句を底力のある聲で言つた。

私たちの話は中學時代の追憶談となり、遂にお互の淡いロマンスに落ちて行つた。私たちはお互の祕密を打ちあけた。彼が退校事件に纏るロマンスを、私は彼に話してくれと願つた。

彼の語るところによると、それは全くの冤罪と云ふ程でもないけれども、随分損な目に遇つたのだつた。公に表はれた如く、それは決して肉交的なものではなかつた。女は彼の家の守で、随分可愛いかつたので、彼は女をいつか好くやうになつてゐた。或は戀してゐたのかも知れない。彼らは近くの「堂の森」でよく遊んだ。唯それだけのことであつた。それが不幸なことに、黨派の關係で、——彼の嚴父は『反政府黨の古狐』だつたので——取り返し附かぬ大袈裟なことに言ひ觸らされたのであつた。

彼は尙語つてくれた。女は無理に強ひられて他家に嫁いだ。彼は戀の瘡痕を胸に抱いて、それを忘れるため、風荒き滿洲の野に永久に消えて行つたのであるが、不幸にも病は彼を永くそこに置きはしなかつた。

そして太田黒は最後に云つた。

『いつかそれを材料にしてきつと書くよ、きつと！』

太田黒はその日歸つて行つた。

二日目、彼からの信書がとどいた。

それには、彼の不變の熱情と感激と大望と努力とが書き連ねてあつた。次に、自分は君に於て甫めて眞の知己を見出し、それを感謝してゐること、今後ほんどうの親友として末永く交つて貰ひたいこと、最後に自分にも少し書いたものがあるから見て貰ひたいこと等が、書かれてあつた。吾々は純な藝術と感情とに生き、他の一切の不純な藝術及び感情とから去らなければならぬ、とも書いてあつた。

『仕事に疲れた父、貧しさに寡れた母たちは、死人の様に眠つてゐた。そして時折甦つたやうに目を覺しては私の病身を氣遣つてくれた。』

『おやすみ、又病氣が重くなるといけないから』

幾度も勸めてくれたが、針の様に尖つた私の神経には、優しい母の言葉も、却つて考を焦立たせるに役立つばかりであつた』

とも書いてあつた。

かう云ふ風に私を信頼してくれた人は誰もゐなかつた。それで私は非常に有難く思つて、出来るだけ深く交りたいと思つた。それにも關らず貸した『夜の光』を、戀慕に近い心を以つて愛惜してゐる自分を見出した。愛惜の情は、更に新しいのを買ひ更へることによつて醫せらるる如き種類のものではなかつた。同じ『夜の光』でもあの本だけに云ひ知れぬなつかしさがあつた。

その又二日後、私は試験の疲れで早目に銭湯に行つた。歸ると、『太田黒さんがおいでになりました』と、妹が告げた。「さうか」と言つて、私は縁側で、湯上りの後のくつろいだ満足を味つてゐた。

ツカツカと太田黒がやつてきた。前の度は絹物の袴などはいて立派な服装だつたのに、今日は荒い棒縞の湯上りをダラリと着流して、亞米利加式のカンカン帽を被つてゐる。

いつ出るか判らないと云つてゐた彼が、五日とおかき出てきたのが、實は多少意外に思はれた。彼は庭を横切つて真直に私のところに来た。

『外に出ないか、兎に角今日は妹シスターとも一緒なんだから……』
女學校に通つてゐると云ふ彼の妹とも會つてみたかつた。

『妹はどこに置いてきた』

『なあに、まあいいさ、すぐそこに待たしておいたから……』

『君はひよつとすると、僕と絶交するだらう』

暫くして太田黒はこんなこと云ひ出した。私はその意味が分らなかつた。

家を出てダラダラ坂を大半分程下りた處が、四辻で木蔭になつてゐる。割りに大ガラの女が、さも疲れたらしく腰を下してゐた。女は俯向いて日傘をイヂツテゐた。年は二十と三十の間で、後者が有利の地位を占めてゐると見えた。私は氣にも止めなかつた。太田黒が大勝で歩き出したこと、及び女が立ち上つて淋しい笑みをうかべながら軽く會釋をしたこと——この二つのことがなかつたら、私は恐らくそのまま通つて行つたに違ひない。其れ程彼女の容貌は目立たぬものであつた——彼女の妙にいちらしい

様子にも關らず。

私は未だに惘然としてゐた。

『僕の妹だよ、僕の妹は大きいだらう』

大聲で、シャアシャアとした態度で、太田黒は云つた。私は忽ち了解した。

『五高の永松さんです』

女は黙つて頭を下げた。私も頭を下げた。

『紹介しなくつていいだらう』

太田黒は私を顧みた。私は首肯した。

二人が話してゆく後から、女は伏目についてきた。女は一口も口を利かなかつた。

段々話をきいてゐると、その女が彼の家の守であつた、二人が仲よくした、その爲に彼が退校させられた、その女であることが判つた。(私の氣持で云へば、この女がどうしてあの守だと思へよう!) 彼ははつきりさうだとは云はなかつたが、さう推察せねばならぬやうに、いつか話してゐた。満洲から歸つて一月も経過せぬと云ふに、かくも早く、既に人妻となつた女と一緒に歩いたりするやうに、どうしてなれたか、私は不思議でならなかつた。彼の物語に何か祕密が含まれてゐなければならぬ。他の女を守だと云つて幾分責任を軽くしやうとする氣ではあるまいか。でなければあの時、二人の關係は彼の語る以上に深入りしてゐたのではあるまいか。もしさうでないとするれば、女の人は余程の輕卒の譏を、否殆んど大膽無謀の叱責を免かれることは出来ない。私たちの後から慎しやかについてくる女の人を、

さうだとは思へなかつた。

或る家の庭先を掃除してゐた下女と立話を初めて、女の人は大分おくれた。

「大變疲れてゐるね、あの人、生活に疲れてしまつて、何の元氣もない云ふ風ぢやないか」

「さうだね、さうかも知れん」

太田黒は續いて云つた。

「僕はあれと同棲しようと思つてゐる」

「そしてあの人の夫は？」

「いや、あれは離婚した。あれでね、なかなか熱情家なんだよ。一年程前にそこを飛び出して、實家に

歸つたんださうだ……」

「さうか」

「君たちから見れば了解に苦しむだらうが、仕方ないのだからね。あれが是非同棲してくれと云ふんだ。僕も可哀いさうでね」

私は全く了解に苦しむだ。彼は二十であつた。

「二人で生活するだけの金はどうする積りなのか」

「あれが僕を養つてやると云ふのさ」

「さうか」

貧しさうではあるが、女の人、あれで金があるのかな——だが、俺なら女から養はれはしないだらう。

私は迷つた上句、思ひつめたやうに遂に口を切つた。私は思はず昂奮してゐた。

『君は永久にあの人を愛してあげることが出来るよ、信するんだね』

私は頬がぼーつと火照るのを覺えた。

『無論さ。僕ももう子供ぢやないよ。……其れを考へなけアしようがないぢやないか』

太田黒はきつぱり云つた。私はいくらかほつとした。が、どこか不満足な氣持が残つた。彼は余りに軽々しく云つてのけたやうだ。心は冷たく冴返つて行つた。

『ここに二人の生活に倦み疲れたものが、何の感情もなしに軽々しく結婚しようとしてゐる。彼らの幸福が永く續き得るだらうか』

幸福は忽ち破壊さるるにきまつてゐる、と考へることが私の感情に諛びたやうな、其のやうないくらか嫉妬と憐愍との混合したやうな氣持で、私はこんなことを考へてゐた。

そこへ女の人が急ぎ足で追ひ付いたので、私たちは歩き出した。

私の提議下舟にのることにした。

私たち二人が既に舟に乗り込んで、最後に女の人が石段を降りてくるとき、太田黒は彼女に聲をかけた

『大丈夫かい』

『は、は』

微かに呟いて、女の人は足を停めて、恍然^{うつろひ}するやうな眼指で、太田黒と私とを視つめた。そして淋しく微笑んだ。

私と太田黒とが漕いだ。女の人は、舟の横木に右側に偏つて腰を下してゐた。『どうぞ、中にお坐り下さい』と云つても『いいね、ここで結構でございます』と云つて、中々動かうとしない。それで舟が動揺れてうまく進まなかつた位である。

いつもの檜木の蔭に舟を繋いだ。天氣のいい日で、散歩に出た女や子供が、こちらをみいみい、向ふ岸をふらふらと通つて行つた。

私たちが話をして面白がつてゐる間ぢう、女の人は先刻の場所に近く坐つたなりにちつとして、つまらなさうにしてゐた。別段話に傾聴してゐると云ふ譯でもないが、それかと云つてまるで聞いてゐないのでなかつた。と云ふのは、時折彼女は話のために微笑ませられたからである。後には所在なさうに水なを弄んでゐる。私は何故太田黒が、彼女を話の圈内に引き込まうとしないのか、不満に思つた。女の人は全く置き去りにされてゐた。彼は何とか話しかけなければならぬと思つた。が、言葉が咽喉に引つかかつたやうにして出なかつた。

女の人の襟首や手は、黒くて大きかつた。顔は白粉が剝げかかつて、醜い素地が見えてゐる。その上、造りが大柄と來てゐるから、可愛いげ等は微塵も見られない。それでも突き出た胸や、腰から上脚への緊張した線などは、尙幾分の野生的な美を失ひはしなかつた。

私は氣持の不自由さを覺えた。不知不測のうちに、無頓着を装ひ乍らも、女の人の氣に入るやうに努めてゐる自分を、——例へば女に無頓着であることを示したい希望などだ——見出した。

『さあ、何とか貴女もお話し下さい』

チエツ！何と云ふ馬鹿げた才氣のない言葉だ。私は譯もなく情ない氣がした。

けれども女の人は、愛相笑ひをして、一寸体を動かしただけで、又俯向いてしまつた。私は急に元氣を盛り返して、太田黒と話し出した。

『このあたりに下女の口はないだらうかね。君、探してみてくれないか』

太田黒が云つた。

『探がしてみたつていいがね、一体誰がゆくの』

太田黒は不思議なことを語り出した。

『ここに離婚して、實家に歸つてゐる一人の女があるとするね。それが又結婚を迫られる。そこにもゆきたくない。死んでもゆきたくない。が、うちに居ればどうしたつて行かねばならない。そんなときどうすればいいだらうか』

私はまだ全くはその意味が判らずにゐた。

『その女には一人の愛人がある。彼らは一ヶ月もすれば同棲することになつてゐる。が、金がない……』
 何を云つてゐるんだ。自分の一大事を話すのに何で三人稱や假定が必要なのか。私は出来ることなら太田黒の頭をイキナリ撲りつけてやりたかつた。が、次の瞬間には私の心が白々しく汗を返つてゆくのを、どうすることも出来なかつた。(然し後で考へてみると、さう云つたのも別に太田黒が不眞面目だからと云ふわけではなくて、彼はいくらかさうすることを氣の毒に思つたのだらう、と思はれた)

『それあ、あんまりだ。どうにかならないかね。どうにか……』

どうにかするには、私は余りに無能力であることを甫めて悟つた。

もつと落ちつくど、自分がそれと同様な場合に立つたら如何に處理するだらうかを、想像してみた。俺ならば何か地面でも賣り拂つて、………とにかく、女の人にさう云ふ苦勞をかけないやうに、どうにかするだらう。

然し、地面を賣り拂つてしまへ、と忠告する勇氣と自信とが私にはなかつた。

『君たちには、それあ、了解できないだらう。だが、自分でその方がせんなにいいか判らないと云ふんでね。それに僕が出てくるとすぐ一緒になるんだ。ほんの暫くの間だよ。僕もそれは辛いがね、他に仕様がないうんだから………』

『さうかね、………でも、どうにかなりさうなものだね——そんなことせずとも………』

下女になることを、これ程の不幸はないと思つた。なせにさう云ふことをせねばならないのか。さうまでしてつくす女の心を冷薄にながめ乍ら、自分は晏閑として、下女にならうとする愛人を黙認しようとする太田黒の氣も知れなかつた。全くその女の人をミヂメに思ひ合した。

『だけど、兎に角、出来るだけは探してみやう』

そこでこの話は先づ落着したことになる。太田黒は既に新生活のたのしい夢想を描いてゐるらしく「二人で住むやうになつたら、是非遊びに來給へ」と、そればかりを幾度も口にしたが、私には未だ何かしら不安な影が残つた。

『もう、行かうかね』

長くゐればゐる程女の人に氣の毒だと思つて、かう私が云ひ出すまで、二時間はたつぶり經つてゐた。その間、女の人は一口も口を利かずに黙り込んで、俯向いてゐたのである。

『あ、行かうね、……つまんなかつたらう』

太田黒は女の人を顧みて優しく訊いた。彼女はいくらか生氣のある笑顔をみせた。

『あなたがあんまり黙つとられるもんですから』

又無駄口を利いたと感じた。私は竿を取つて、舟をグイと回轉さして、漕ぎ下つた。

舟屋を出ると、今度はどこにゆかうかと云ふことになつた。女の人は太田黒を見上げて「坪井……？」と囁いた。行きかけたとき、太田黒は「一寸」と云つて女の人を止めて、帯の後の微かな塵を、指の甲ではたいてやつた。その間彼女は足下を見詰めたまゝ、従順に身動きもしなかつた。大變美しい光景だったので、羨望の眼を以つて眺めた程だつた。

初めは、女の人と一緒に歩く、恥かしいやうな内心の誇を感じぬわけではなかつた。けれども探す家には中々見付からない。それに二人の步調は腹立たしく緩くさい。女の人は女なるが故に太田黒は病後なるがために。誇などはもう微塵も感ぜられなかつた。白晝、不良少年じみた男と、田舎臭い女と共に、ノロノロと通りを通らねばならない私自身の、鎖につけられた犬のやうなみぢめな姿。何と云ふ馬鹿げた役を引き受けたらう。私は自分がミヂメで、情なくて、泣きたく思つた。そんなとき泣けるなら、あどはどんなにセイセイするだらう。

漸くのこと目的の醬油屋——太田黒の云ふところによると、そこに女の人の兄が下男をしてゐると云

ふ——は見出された。私たちは要事が済むまで、手前の四辻でそこいらをぶらつき乍ら待つてゐることにした。

『あれで非常に熱烈なんだよ。今夜も又一晩ちう泣くだらう。頸にカヂリ附いて一晩ちう放さないんだからね。そして一度會つたらそれつきり決して別れやうとしないんだ。ほんとうに可哀さうなんだよ、死ぬ死ぬといつも云ふんだからね。こちらに來るときもね、阿蘇に行かうと云ふぢやないか。それで僕もはつとそのことに思ひあたつて、思はずツツとした位なんだ』

太田黒はキレギレにこんなことを話した。あの女の人がかくも大膽で向う見ずなのは案外であつた。そしてその大膽さは女性として最も誘引的な美點の一つと、私は考へてゐた。

『兎に角死なないやうにしなければいけない。女の人がある心になる隙がないやうにしたまへ。可愛がつてやるんだね。そんなことがあつても、お調子にのつて「死んぢまうか」なんて云はないやうにし給へよ。恐ろしいこつだ』

『僕もいつもそれを云つてゐるんだよ』

『時に君、あの女幾才と思ふ』

『さあ、………わからないね』

『十九だよ』

『ふけてるねね、僕は三十かと思つた』

『ははアどうだ、驚いたらう？』

さう聞いてみるとやはりそのやうにも見なさるゝが、それにつけてもあの女の人に、如何に多くの悲しみや苦痛が、のしかゝつてゐることだらう。

女の人は愛らしい男の子を抱いてきた。すぐ後からその子の守が來た。女の人は赤ちやんを、出来るだけ高くさし上げたり、頬ズリをしたり、左右に揺つたり、色々にアヤした。そして非常に若々しく嬉しさに見えた。

が、私たちが別れやうとするときは、又もとの淋しい女になつてゐた。恰度母も田舎に行つて家になるから、うちに來ないかと云つたが、女の人だけ先に宿に行つてゐることになつた。

『いろいろお世話様に預りまして……』

そして女の人は三度び淋しく笑つた。

さうしてあの子は一体誰なのだらう？

『辛い』太田黒は訴へた『もつとゆつくり歩かう』

私は思はず急ぎ足になつてゐた。

太田黒は、彼は今日呼び出すために女の人が打つたと云ふ電報を私に渡したが私は不知不識それを寸々に引き裂いてゐた。

食事を済して再び家を出たときは、暗れた空が押し移つて、そのまゝ靜かな夜となつてゐた。空には一面に星が眠つてゐた。暗闇から、涼しい風が袂を拂つた。私たちは阪を下つて行つた。

『君は見違へる程進歩した。價值批判の目が非常に鋭くなつた』

こんなこと云ふ。

『さうでもないね。僕はね、女の前となると目が眞つ暗くなるんだよ。若い女と一緒に歩くことさへ、ムズムズする程の幸福なんだ』

『ぢあ、滿洲でなら、君は幸福のために死んぢまうだらうよ。あの女なんか、ほんとに君と交際さしたいね。○○○○○○。女學校を中途でよしたんだが、それが君、素的にワカツテゐるんだよ。——あつちではそんな女は澤山だよ。僕は毎晩遊びに行つてたがね。……』

私は未だみぬ夢のやうな世界に憧るゝ一方、太田黒も仕方がないと思つた。

行くとは約束したものの、太田黒の宿にゆかうかゆくまいか今更迷ひ出した。女の人と一夜話をしてそこに泊り込めば、どんな恐るべき結果に至らないとも限らない。そのことにかけては全く自信がなかつた。○○○○○○○○一方には、然し、もう一度會つてみたい、と云ふ心が動いてゐた。

『今夜、泊つてゆかないか』

さう云つて、やがて又、

『君は實生活を豊富にしたいと云つてたね』

と、のどき込むやうにして太田黒が云つた。私ははつと、何だか彼の意中がわかつた氣がした。恰度曲り角に來た。

『僕はこれで失禮しやう』

『なせ』

如何にも案外らしい。

『今だ、そうれ、機會は永久に失はれる！』私の一つの心が他の一つに入智慧をした。『まだ遅くはない。たつた一口だ。行くと云へばそれでおしまひだ』明日の試験も、母も妹も、名譽も友情も、私自身さへも、すべてを蹂躪して、一晚ちう頸にかちりついて放さないと云ふ一個熱烈な女性と共に、相抱いて底知れぬ倫落の淵に、顛落してゆきたい、悲壯な衝動を、私は感じた。——そしてそれは私が仕やうと思ひさへすればいつでも出来ることであつた。が、地球の内部には如何にドロドロの熔岩が燃えてゐやうとも。その表面は冷たく静かであると同様、私も又表面は非常に冷靜であつた。努力してではなく自然にさうであつた。私はなせかにこにこして答へた。

『君たちを阻げることになるから』

私は嘘を云つた。そんな氣持もあるにはあつたが、それもほんの第二義的のものに過ぎなかつた。

『いや、それなら心配御無用だ。もう余りに慣すぎて却つて苦痛な程なんだから……』

『さうか。でも僕は歸るよ。是非歸らなければならぬのだ』

太田黒は名残り惜しさうに尙二三度勸めて、

『ぢあ、いつかあつちに來たら、きつと僕んちより給へ、ね』

『ああ。ありがたう。……ではさやうなら』

『さやうなら』

私たちは別れた。

『勝利！勝利！』

と、私の心はなせかかう叫んだ。

『お前はいい機會を見す見す取り逃がしたのだ！』

心の他の部分にこんな聲があつた。

『そんなこと、どうでもいいではないか』

又他の一人が云ふ。何かしら身輕な、うれしい氣持であつた。自然と足が急かれた。

翌日、女中の口に心あたりはないかと母に相談してみたら、そんな二十位で女を拵へるやうな者とは係りあはぬがよい、又その女もとても碌なものではないにちがひない、と頭からやつつけられた。腹は立つが、いつものことでさう反對もせず、それをいいことにして、努力もせず、どこかいい口がありさうなものだ、位に考へてゐた。どうか女中だけはしすとも、いい具合に都合がつけば結構だが、とそれを利己的に考へてもゐた。危険は私自身にあつた——女の人とこれ以上の關係をつけるのは恐ろしいことであつた。

それから二三日して、太田黒から手紙が来た。

先の手紙の如き熱情や大望は記してなかつたけれども、尙眞摯な心のもがきが見られた。

昨日はお邪魔致しました。岩崎原のアバラ屋に歸りついたのが五時でした。歸るとすぐこの手紙を書

いてるのです。昨夜は、あの女と、あの旅館で、語り明かしました。でも淋しいものでした。あなたが来られなかつたのは、自分が淋しく黙り込んでゐたからではないかしらと、あの女は心配してゐました。そんな馬鹿なことがあるものか！とは云つたものの、然しなせあなたは来られなかつたのです？

あの女は、どうく機織場の女工になつてしまひました。それも、彼自身が、よほどその方に氣が進んだからでもありましたが。來月までどうか辛棒してくれ！と、私は頼りない、淋しい慰めを、彼女に與へて、上熊本を出ました。私を見送る彼女の姿が、段々小さくなつてゆくのが、夕暮近い空の下に、ホソボンと見られるのでした。私は何とも知れない心細さを覺えました。

……………それから、余り勝手な申し分ですけど、下宿の方は、必らずお世話を願ひます。あの女と貧しい生活をするやうになつたら、是非遊びに来て下さい。あの女もあなたのやうな静かな人と、交際がしたいと云つてゐます。それにあなたは昨夜はなせ……………？。

何だか、あなたと話すが、其れ自身大變有益に思はれ——余りのエゴイズムのやうですけど——私の淋しい心が非常に愉快になつてきます。實際、それは淋しい心なんです——どこにも持つてゆき場のないほんどうの孤獨者の寂しさです。

本當に、あなたは、私と、もつと深く、廣く交つてくれませんか。さうして、自分の悪い所も見出し得ない程悲しい私を、偉大な力で甦らして下さいませんか。

エゴイズム！エゴイズム！私はほんとに、こんなにまで情ない心を、自分でさう怒鳴りつけ乍ら——呪ひ乍ら——而も、私はそれをどうすることも出来ないのです。悲しい私です。それで私は焦つてゐます。私は蘇生らねばなりません。蘇生らうと焦つてゐます。そして、私は心からあの女を愛しやうと思ひます。あの女はすべてを私に捧げてゐるのです。それにこのエゴイズム！それを思へば、私はやはり蘇生らねばなりません。私が蘇生することは、ほんとうにあの女を愛することだと、今は、強く、さう私は思ふのです。

.....

女中間題がとにかく片がついたことで私はほつとした。これは利己的な氣持であつた。彼女と私は二度と會はないだらう。さうすれば安心だ。公平に考へて、女王は尙女中よりか獨立的ではあらうけれども、それでもやつぱりすつかり安心出来ない、暗いあるものが、そこにあつた。どうどうなるやうになつた、といくらか絶望的に、運命的に、私はかう考へた。彼女のことからなるべく遠ざかりたい氣持が、その下に暗々裡に働いてゐた。

私は又あの晩、彼らの宿にゆかずに、どんなに救はれたかを益々強く思つた。あの時行つてゐたら、今の私のミヂメさは想像される。それは、過ぎ去つた暴風雨を想起して、あの時は實際危険だつたと思ふ、その感じに近いものであつた。

それに又、太田黒は斯くまで眞剣なのに、私の方では何處までも生ぬるく、烹ねきらなかつたのが、情けなく思ひ合された。さう云ふ色々の感じがぐるぐると出てきた。全体として、決して愉快なもので

はなかつた。

其の後、太田黒とは長く會はずにゐた。

或る日、中學時代からの友の『が來た。彼は太田黒のことを話した。それによれば太田黒は仕様のない奴であつた。僕も大部ホラを吹いたり嘘を吐いたりするが、太田黒のやうな思ひ切つたことは云へないね。天下は吾が物位に思つとる！』はさうも云つた。あゝなつては、人間も仕方がないな、とも云つた。

『の云ふことが如何に多くの眞實を含んでゐるにせよ、』が如何に私の親しい友であるにせよ、私は尙太田黒について一つのことだけは疑へなかつた。それは太田黒が私の前で行ひ、又語つてきかしたすべてのことを云ふのである。それちのことがどうして疑へやう——あの熱のある言葉！』が語る其れ自身については、『フフン、さうかやつぱりさうかなあ』位の同感はされても。

夏の休みに入つて五日目、私は展墓のために故郷に歸つた。太田黒の寓居は恰度路すぢにあたつてゐたので、私は彼を訪ねた。

私たちはその小さな町の、たつた一つしかないカツフェーで、テーブルを圍んで話を交へた。彼は一層瘦せこけて、大變疲れさつた様子で、哀れに見えた。

『又病氣で寝つちまつたんでね、新聞社の方も駄目になつちあつた』

『それでこれからどうするつもり？』

『なに、小學校の方に出ることにしたんだが……』

『時に、あの女の人も度々會へるだらうな』

『あれか、あれは君、婿さんが来て連れて行つちあつたよ』

私は呆然とした。

次の瞬間に私は忽ち了解した——少くも自分ではさう云ふ氣がした。次の瞬間には私の氣持は、もう嘲笑的な冷淡さに冴返つて行つた。「フン、おきまり通りか、フン」と云ふ風に。

『夕方あの女が来てね、夫が私を迎へにくるから、あなたもいつしよに停車場までお出なさいつて、云ふんだよ。それであの女と(彼はなせかかの女を呼ぶにいつもあの女なととヨソヨソしく云つた)いつしよに待つてゐたけど、七時んでこないだらう。それで終列車かと思つて待つたが、それでもどうどう來なかつた。ところが翌日、十時頃だね、僕が醫者のかへりに文華堂(書物屋)の前を來かかつたと思ひ給へ。向うからあの女が來てゐるだらう。あの女は俯向いてゐた。その少し前を三十位の男と五十位の女と併んで來てゐたが、婿さんだな、とすぐ氣付いたね。バナマを被つて立派な男だつたよ。僕は知らんふりして行き過ぎやうとしたんだ。ところが君、あの女が僕を呼ぶ止めるぢやないか。驚いたね。どうだ、可笑しな女だらう。ハハア……』

だが、その笑ひはどつて付けたやうな、そして力ない淋しいものだつた。

『それから、佐賀に行かないかと云ふだらう。それでいいのかと訊いてやつたら、いいと云ふんど。す

るうち、婿さんが振り返つたので、僕はさつさと逃げ出したんだが………』

太田黒は續いて色々のことを語つた。日本人、朝鮮人、支那人、露西亞人、等の賣春婦の話——その得失長短、○○○○、殊にロシア娘がいかに執拗いかを、ものうげに少しづつ話した。

『滿洲に行つたら、僕ひとつ案内しやう』

『うん』

私はなせか暗い氣がした。

私たちはカツフェーを出た。

『醫者はどこ?』

『吉村だ』

『では、そこまで一緒に歩けるな』

とは云つたが、一つの疑問が浮んで消えなかつた。吉村と云ふのは専門ではないが、特に皮膚病をやるところなのである。

『何と云ふのかね。悪魔主義と云ふのかね。僕は時折、非常に殘忍になつてしまふのだよ。そんなときは女なんかも出来るだけイチメテやるんだ。可哀いさうなんだがね。………』

『それから僕はふと何もかもイヤになつちまうときがあるのだよ。それで僕は困つてるんだ。虛無主義と云ふ奴かね』

それな氣持は誰にもあることではある。然し彼のはそれがヒドイ病氣なのだらう。彼は病氣で食ひ倒

るればしまるか。

『や、ではさやうなら。また來給へ』

『さやうなら』

太田黒は狭い路地を曲り込んだ。私は吾が哀れな舊友の後姿を振り返らうともせず、色々のことを考へ乍ら歩いて行つた。

太田黒の行爲は、或は太田黒は、どんなに考へてもやはり一つの謎として残つて。謎を解き得るには最も明敏な頭腦を要したらう。

私は悲しい暗い氣持にさせられた。過去の暗い罪業が、心の中で頭をもたげた。

私は長い間、重苦しい謎の中を彷徨したのち、二度と太田黒に會ふまいと決心して、菊地川べりを故郷の方に、ゆつくりと歩いて行つた。太陽はヂリヂリと頭上からゐつけた。風は死んでゐた。木の葉は埃にまみれて、術な氣に俛首れてゐた。

夏の休みが終へて間もない或る日、私は一人の友から彼が太田黒に會つたと云ふ話をきいた。太田黒は美しい若い女といつしよであつた。その話によれば、その若い女が例の女の人でないことは、明らかに想像された。(大正十二年八月)